

主催 非暴力平和隊・日本 (NPJ) 対話集会

—記録—

【抵抗のかたちと希望

—3.11、沖縄、上関から】



非暴力平和隊・日本 (NPJ) 主催

対話集会

○日時：2021年3月27日 14:00-17:00

○場所：東京都文京区シビックホール: 会議室 1 & 2

(文京シビックセンター3階)

○報告者：

田村あずみ氏 (滋賀大学講師、英国ブラッドフォード大学大学院卒)

大澤菜実氏 (花伝社編集者、元 SEALDs メンバー)

大畑豊氏 (NPJ 共同代表、辺野古抗議船船長)

前田恵子氏 (NPJ 理事、元生協理事)

○司会： 君島東彦氏 (NPJ 共同代表、立命館大学憲法学教授)

○進行：

14:00 君島代表、「この討論集会について」

14:10-16:00 田村、大澤、大畑、前田の各氏が20-25分スピーチ

16:00-16:15 休憩

16:15-17:00 全体討論

■ あいさつ

君島東彦

(NPJ 共同代表)

最初に私から今日の集会の趣旨をお話いたします。

非暴力平和隊・日本は 20 年近く活動してきました。最近ではメディアに出ることは少ないのですが、20 年前は非常にメディアに取り上げられました。今日話をされる田村さんが 20 年前、日本でかなり早い段階で非暴力平和隊に注目されて立命館大学で集会を企画されました。今日は 20 年ぶりのコラボになります。

非暴力平和隊について簡単に紹介いたします。

英語で Nonviolent Peaceforce、非暴力平和隊は、1999 年、オランダのハーグで開催されたハーグ平和アピール市民社会会議に参加した二人のアメリカ人が非暴力平和活動の大きな団体を創ろうと提案してグローバルな運動として 2002 年に設立されて 20 年たちました。

二人のアメリカ人とはデイヴィッド・ハートソーとメル・ダンカンです。彼らは、戦争反対運動だけでは平和は創れない、どのように非暴力的に平和を創るのかを模索していました。ガンディの影響を受けたキング牧師の非暴力抵抗運動もありました。1980 年代以降、ガンディの発案になるシャンティ・セーナ(平和隊)を継承発展させた非暴力的介入の NGO、たとえば国際平和旅団 (PBI) が活動して

いましたが、それを発展させてもっと大きいのを創ろうと提案してできたのが非暴力平和隊です。2000 年頃から彼らは世界中を回りオーガナイズして日本にも来ました。

私たちが彼らのオーガナイズを受け止めて日本でそれに呼応するものとして創ったのが非暴力平和隊・日本です。ですから、これは抵抗から始まって平和を創る方に発展していく運動です。

非暴力平和隊・日本として、抵抗という題名を掲げて集会を開催するのはなかなか久しぶりというカリフレッシングなのです。抵抗から始まって平和を創るのが非暴力平和隊・日本の目的です。今回、田村さんの近著「不安の時代の抵抗論—厄災後の社会を生きる想像力」をもとに非暴力平和隊・日本として抵抗について改めて考えてみようとして「抵抗のかたちと希望—3・11、沖縄、上関の経験から—」としました。

非暴力平和隊・日本の理事として重要な仕事をされてきた大畑と前田さんにはそれぞれの抵抗運動があります。沖縄と上関です。ですから、田村さんの本から始めて沖縄と上関の抵抗について話してもらって、それから田村さんの本を出された花伝社の編集者の大澤さんにも話を聞いて、4 人の話を聞いたうえで議論したいと思います。

いかにして抵抗はありうるのか、どんな風にありうるのか、どこに希望があるのか。田村さんに最初のスピーカーをお願いしたいと思います。

■ 報告 1

田村あずみ

(滋賀大学特任講師)

【この本の出版（研究）の背景】

昨年6月に出版したこの本は、3・11後の反原発デモのインタビューを通じて、この時代にどんな抵抗ができるのかについて書いた本です。私は昔から、多数派の価値観からこぼれ落ちるといふか、期待される行動と自分がやりたいことの間はずれがあって、閉塞感を感じてきました。

立命館大学国際関係学部卒業後に新聞記者になりましたが、日本社会の生きづらさについて、考えることが多くなりました。社会の現実、息苦しい世界の「外」・「今とは違う現実」を望む衝動が暴力として現れたり、理不尽な現実への適応努力が過労自殺、過労死などをもたらしたりします。またロスト・ジェネレーション（就職氷河期世代）や非正規労働者の問題もあります。そういう人たちと私は紙一重であったという思いがありました。

その中で疑問に思ったのは、なぜ私たちは抵抗しないのかということ、暴力に訴えることなく私たちがどう抵抗するのか、ということでした。それを考えたくて英国のブラッドフォード大学院修士・博士課程（平和学）に留学しました。

【本書の出発点 現代社会における「抵抗の不可能性」】

60年代の学生運動では、今とは別の世

界を想像することができたし、その為に行動することができました。なのに今、なぜ声が上げられないのでしょうか。

まず「敵」が見えないということがあります。生活の安定を得るために会社の理不尽な要求に従ったり、長時間労働を受け入れたり、労働市場で求められる人材になるために自分の時間や個性を殺して自発的に服従する。即ち敵は外にいるのではなくて、自分の内側にいるわけです。こうした生活に精いっぱいになると、他者の苦しみに配慮できず、連帯する余裕もなくなります。

そういう中で、私達の抵抗の言葉というのはどこにあるのでしょうか。リベリズムでは、自分で情報を得て、自分で判断して、自分で責任を持って行動する自立的・自律的主体や道徳的主体としての個人が想定されます。しかし、それと現実社会を生きる私たちの脆弱な身体との間に乖離がありすぎると私は感じます。その言葉には私たちの弱さが全然反映されていない。それがあきらめとか冷笑、反知性主義の下地となっています。存在を軽んじられ、日々の生活に疲れ切った人々が、どうやって抵抗するのか。私は、まず無力感と絶望の底に降りて、そこからどうやって声をあげるかを考えたいと思いました。そして人間とは弱いものだということを織り込んだ倫理とか責任を考えていかねばならない。そこで、3・11後の反原発運動参加者にインタビューを始めました。

【なぜ「3・11」後の反原発運動？】

3・11の原発事故は日本のターニング・ポイントであるべきものと思っています。

これまで私たちは、社会が求めるものに自分を迎合させることで日常の安定を保ってきました。しかし原発事故は、その日常を揺るがし、壊しました。「原発は安全」としてきた科学者や、自分たちを守ってくれると思っていた政府への不信が露わになった。そして一番重要なのは、自分たちの想像の外部にあった「他者」を発見したということでもあったと思います。それは（東京の人にとっての）福島の人々、原発労働者或いは原発事故によって自分たちの利益をそがれる未来世代です。

自分の「日常」を構成していたシステムのもろさや非倫理性を原発事故が暴き、その応答として反原発運動がありました。

【発端としての情動の表出】

私がインタビューで一番知りたかったのは、人々がどうやって行動を始めるかということでした。デモ参加者の語りでは、まず「どうしていいのかわからない」という混乱や不安をかかえて、居ても経ってもいられず路上に出た、そこで仲間を見つけたと語る人が多くいました。はっきりした意思を持たなくても、そういう情動の表出から出発できるのです。

情動というと単純で利己的なものというイメージがあるかもしれませんが、社会（関係）の複雑性を無視して単純化する

のは危険で、だからこそ理性が大事だとよく言われます。だけど私は情動の力は大事だと思っています。

（編集者注記：情動：affect＝（人の）心を動かす[心に影響を与える・感情をかき立てる]、[感動]させる＝スペースアルクより）

デモというと怒りのイメージがありますが、反原発運動参加者の話を聞いて印象的だったのは後悔の感情です。例えば、「原発を推進してきた人たちに対して怒りもある」けれども「原発を止めるために主体的に関わってこなかったという反省、自分への怒りもある」という声、また「日本の経済成長の間に、自分たちは原発の恩恵をあずかっていた」という反省から参加したという人がいました。

後悔の念が強かったというのは、私が首都圏の人間から話を聞いたということがあります。福島原発は首都圏で使用されるエネルギーを発電していたわけですから、自分たちの日常が、見えない人々にリスクを押し付けてきたという反省、自分は原発運動に関係ないと思っていた無関心が大きな被害を生んでしまったという後悔があったのです。

【私たちの責任とは？】

怒りと後悔について、あるデモ参加者がこのように話していました。「自分の瞬間的な行動の原理は、政府や東電の明白な嘘に対する怒りだ」けれども、「子供たちに申し訳ない、情けない」との思いも

あり、「自分も東電であり経産省であり、同罪です」と。

この言葉の大もとにあるのは、「チッソは私であった」と言った水俣病運動の緒方正人さんの言葉です。緒方さんが問題にするのは、「システム化された社会」です。その中では水俣病の責任を追求しようとしても、行政側もチッソ側も責任者がコロコロ変わって、結局、責任があいまいになってしまう。でもそのシステムの中に自分もいるではないか、自分もチッソという会社にいたら同じように無責任なことをしたのではないか、という問いを緒方さんは発します。それに近い問いが、反原発運動の中にもある。複雑な社会システムの中で、自分の行動が何につながっているのか見えない、そういった構造の問題もあるのです。

とすると、原発事故によって露わになったのは人間の愚かさというよりも不完全さということではないでしょうか。私たちが見えるもの、想像できるものに限界があるとき、私たちは十分な責任を負えるのかという問題を突き付けられたのです。

けれども責任を負えない、で済ますことはできない。そうすると、不完全さを受け入れつつ、なお応答しなければならない。そのやり方を私は反原発デモの中で見たような気がします。

印象的だったのは、「自分は事故のことを忘れてしまう、忘れっぽいから自分への戒めとしてデモに参加する」という参加者の声です。それは不完全な人間なり

の、ゆるい責任の負いかたかなど。普段は日常でいっぱいいっぱいだけれども、週一回、あるいは月一回のデモに参加し、他者と向き合い、もう一度自分に思い出すことを強いているような場でもあるのだなと感じました。

インタビューで、何故この場に来たのかと問うと、皆さんは「自分は頭数になりに来た」とよく語ります。それは、行動の中に自己を投じるという意味で、個が運動に溶け込んでいるようなイメージがあるのですが、その一方で、そうして「溶けた個」としてデモに参加することに満足や誇りを感じる、だから自分のためにやっていると彼らは話します。そこに受動と能動の重なり合いのようなものを感じました。

さらに、日常で見えていなかった他者の怒りを自分に刻もうとする人々もいました。例えば、原発事故の後に反原発運動に参加するようになって、その延長でホームレス排除の現場に行ったという人がいました。その人は運動で「廃炉」というコールをすることをためらったそうです。誰が廃炉をするのかを考えた先に、それはホームレスみたいな疎外された人たちなのではないかと彼女は考えた。そういった人たちの現実を知らない限りは廃炉と言えない、とホームレスの現実を見に行った。そういった、今まで自分の想像力の外にあった人を刻もうとする姿勢も見られました。

【運動の継承と希望について】

運動の中で生まれ、伝播してゆくものは何でしょうか。もちろん「声をあげられるのだ」という勇気かもしれないし、実践的なスキルかもしれない。いろいろなアクションのかたちかもしれないけれども、私が運動の中で生まれているものとして一番重要なのは、「次はこんな行動をとりたい」「自分はこう生きていきたい」という情動だと思います。それは「希望」と呼ぶこともできるかと思っています。

これは運動の中で実際に人に会って、身体的に伝達していくものなので、場を共有しない人々（運動の外）には伝えにくい。こうした熱（希望）をどうやって伝達していくかということを考えています。

この本の編集者、大澤さんが作ってくれた帯にこう書かれています。

「大震災、原発事故、そして感染症―日常に突然生じた亀裂が私たちの生の脆さを暴くとき、希望を語りなおすことはできるのか？」。

けれども、実は本を書こうとした当初、希望を書くつもりはなかったのです。大澤さんから希望を書いて欲しいとリクエストがありましたが、私は希望というのは胡散臭い言葉だと思っていました。「希望なんてありませんよ」と返そうと思ったのですが、それも違うなと思いました。自分は確かにこの本で何か伝えたいと思っている、それは希望ではないかと思ったのです。

希望というと光のイメージがあります。

あそこに我々の希望があるから、こうやって進めばいいと道を指し示す光。それが今の知性と考えられているものではないでしょうか。しかし私が常に感じてきたのは、行くべき場所が見えたとしても、不安の中にあって日々の生活に疲れ切っている身体に、立ち上がってそこに向かう力が残っているのか、ということです。

これに対して私は、熱としての希望ということを考えます。それは内側から私たちを突き動かすエネルギー源で、これがないと抵抗できないし、抵抗したいとも思わない。私がデモに参加した方から受け取ったものは、この熱としての希望だったと思うのです。それが「暗闇」の中で他者に出会うために踏み出す一歩、絶望の中から最初の一歩を踏み出す最低限の力となる希望だろうと。それを継承していかなければと思っています。

3・11から10年たって、目に見える抵抗の形としての反原発デモは減っています。けれどもデモの場で自分が受け取った抵抗のエネルギーを使って、自分の日常を変えようとしたり、別の行動を始めたりしている、見えないけれども「熱」が継承されている、それも運動の継承だと思うのです。自分が受け取った熱をこれからどう継承していくか、行動をしていくか。こうしたことを今こそ語らねばならない時期なのではと思います。

君島

駆け足でこの本をご紹介いただきま

したが是非一読をお願いします。

田村さんは、その辺にある出来合いの理論では人々は動かない。みんな疲れている。本当に人を動かすのは情動だということを打ち出しています。専門家はすぐ理念とか理論を語るのですが、それでは多くの人は動かない。田村さんの本はリアリズムの本だと思います。ものすごいリアリズムで、現在の日本人の感情をどこまでもリアルに冷徹に見ていったとき、つまり絶望の底に降りていくという言い方ですが、そうした時に、人々はいつ、なぜ行動するのかと考えると、それは情動によって動くということです。人によってはもう少し理念とか理論とか理想を持ち出すのですが、田村さんのリアリズムは、このリアルなところからどうこれからの社会を創っていくのかというラジカルな問題提起だと思います。安易な理論だとか安易な理念を語るだけでは不十分だということです。大いに反省させられます。

続いて花伝社の大澤さんをお願いします。

■ 報告 2

大澤 菜実

(花伝社編集員)

ちょっと長い自己紹介になりますが、私自身のことを語ることがこの本の内容紹介や執筆依頼の経緯につながっていきますのでご容赦ください。

【自己紹介～】

阪神淡路大震災の街に生まれました。3・11の時は高校生でした。大学生の時にSEALDs KANSAIの立ち上げに参加しました。

【社会運動に参加するまで①】

冷笑系とか意識高い系というか、例えば原発自体には反対していましたが、自分が新しいエネルギーを考えられるわけではないし、怖いと思っているだけでは反対できないと思っていました。右左も関係なく客観的で冷静的に物事を考える……とかそういうことを漠然と考えていました。

先ほど、怒りと後悔という話がありましたが、私は、怒ること＝未熟みたいな思いもあって、怒りについて特に表現することに抵抗感があって見事に扱いやすい人間に育ちました。

【社会運動に参加するまで②】

そういう自分が変わるきっかけとなったのは20歳ごろですが、受験に失敗したり何もかも行き詰まって、大阪の下町の方でアルバイトをしていた時期がありました。そこで出会った女の子たちと関係をつくるようになって、そこにある現状、貧困とか暴力とかとても自分たちでは立ち向かえないような状況の背後に政治があるということを初めてそこで知って、自分が信じていた国は何でこんなに冷たいのだろうかと思うようになりました。一方で、逸脱してしまった自分対

して彼女たちも街の人たちも本当に優しく温かくしてくれて、人とかかわることで弱くても助け合っていけるかもしれないことを知りました。自分一人で未来を背負わなくてよいのだということを知り、彼女たちや街で教わりました。

【社会運動に参加するまで③】

もう一つの変わるきっかけは、パレスチナ旅行です。

そこではデモなどでは変わりようはないという状況で声をあげる人々を見ました。そこでデモに参加し—小さなデモですが—一緒に歩きながら彼らが自分たちは自由だと何度も言葉にするわけですが、その意味がやっとそこで腑に落ちて、それまで原発反対と言っている人たちに對して無責任だとかできもしないことを言って、と思っていました。言葉にすることによって自分自身を定義しているのだということを感じて、そう言わざるを得ないその人の人生の来し方があるのだということが分かったし、それがどれだけ人間にとって大事かということが身に染みて分かりました。彼らが言葉にすることによって、自由だということによって自由であるのだということを知ることができました。

自分も、一緒に働いている女の子のために或いは自分のために、自分は自由だとか自分には尊厳があるということを知り、果たしてそうではなかったとしても、それを言葉にしてみたいと思ってデモなどに行こうと思うようになりました。

【デモの場で】

溶けた個について少し話したいと思います。

多くの日本人は怒ることが苦手だと思えますが、小さい頃からその機能を周到に剥がされてきたような側面もあるし、そうやって社会のシステムに順応する準備をしてきたというか、それが学校システム、教育の中に刷り込まれているように思うぐらいに感じています。デモの中に身を置くと、ここにいる人たちがどこから逃げてきた人たちだと感じるものがあって、ただそれは前向きな逃亡といった、貴方もここに来ましたかと思うこともあって、そうすると自分たちはここに力があったんだなという、それは隣に誰かがいて初めて感じられることです。

動機は違えどもみんな色々な社会システムの中で何かを削られることから逃げてきたことが感じられるし、それはあの場で他者を感じて初めて獲得できたパワーなのかなと思います。「私たち、これたやん」というパワーですけれど、これが私が感じてた溶けた個としての気持ちよさ、心地よさだったなと思います。

食べて生きていくために自発的隷従を強いられている日常から逃げてこれたということ、そこに戻っていかねばならないのもまた事実なのですが、戻るときには私はそこから逃げる可能性を模索したいとか、出来るんだと思える人間として戻っていくことができる。その時、少なくとも自発的隷従状態をどうやって変え

ていこうか、どうやってここから抜け出そうかということを考える人間になっているのです。それが分かったのがあの時の私の希望だなということを常々思っています。

【不安の時代の抵抗論③】

田村さんに初めてご連絡したのは2018年9月でした。きっかけはツイッターに流れていた田村さんのご論考が目に入りまして、他にも田村さんのお書きになったものをいくつか拝読しまして、まずこの国にいる一人の若者として、田村さんのかかえられていた絶望にリアリティを感じました。

君島先生も繰り返し言われていましたが、研究者としての姿勢にすごく惹かれまして、田村さんご自身がいかに生きるかということと、その心の動きが研究内容に密接にリンクしていました。こんな研究者がいるのだと思ったし、科学的であることと客観的であること、そして誠実であることがギリギリのところまで溶けているという印象で、こういう方に研究者として言葉を残してもらわなくてどうするというのをすぐ感じて、ここまで言葉の話しをしてきたのですが、そこに対して誠実な方だと思って自分の運動とつながったという気持ちがすごくありました。

この本には人々が絶望の底からいかに抵抗していけるかということが書かれていますが、田村さんはそれに対して既存の「答え」に徹底的に食い下がって

く。

話はそれですが、最近、元 DEALDs の人たちと研究会を立ち上げようとしています。研究のための研究ではなく、日本で社会運動をやってみてそこにどんな壁があるとか、そうしたことを肌身で感じてきた私たちが、或いは10年後に社会の中心になっている私たちが、何かビジョンを共有して、ビジョンを共有するための道程を探り合って、そこに真剣に向かっていくために何をするかといった作戦会議を研究会でしています。どんな言葉でどう語りかけるか、どうやって政治に介入していくかということを、身を削って try and error をやりたいと思っています。そういう場で、この不安の時代の抵抗論が生きるとしています。

やはり、自律的主体としての個人とか民主主義への信頼を語る個人と日本に生きる私たちは前提が全然違うし、じゃあどうすればよいのかを考えたいと思っていました。3・11の路上に出た人も同じように言葉を必要としていたのだと思います。

知識人が掲げる光としての希望ではなく、私たちの手の届く希望を書きなおしてくださること、その試み自体また誰かの刺激になるだろうということを期待して原稿を依頼しました。

継承のことが書かれていますが、SEALDs をやっている時も若者としてどう思いますかとよく聞かれていました。この本の中で、運動スタイルや団体名、活動場所を引き継ぐ＝継承という方法論

ではない「継承のかたち」を田村さんはお書きになっていることに私は共感を持っています。

例えば私がさっき言ったような「私たちこれたやん」という感覚から得られたパワーを会社内とか家族とか身近な格差と戦うことに転換できれば、それも一つの運動の継承のかたちだろうとか。或いはさっき言ったような作戦会議の場だって運動の継承だし、決してそれは何もないところから生まれたわけではなくて、これまでずっと社会運動をやってこられた人たちがいるから生まれるので、それはすごく大事なことだと思っています。

【不安の時代の抵抗論 よろしく願います！】

皆さんとこの本をきっかけに或いはこの本の先の物語をご一緒につないでけるといいなと思っています。

君島

大澤さんは田村さんを見つけ出された方です。田村さんにこの本を書かせた方です。

プレゼンでもお分かりのように大澤さんは社会に対して学問に対して厳しい目を向けておられる。研究者はどのくらいともに研究しているか、社会を分かっているのかということが問われている。これから花伝社に注目です。

今日の集会の企画は田村さんの本がきっかけですが、大畑さんの今までの運

動の軌跡も非常に称賛に価すると思っています。大畑さんよりこれまでの活動—抵抗のかたちと希望—を紹介していただきます。

次に前田さんからも語っていただき最後に4人の話しをまとめてどんな議論ができるかなと思っています。

今日の集会には北海道から九州まで、色々の方、世代の方々、肩書の方々に参加されています。

■ 報告 3

大畑 豊

(NPJ 共同代表、辺野古抗議船船長)

現在は沖縄県名護市辺野古近くの汀間(ていーま)という集落に住んでいて、辺野古抗議船の船長や諸々の辺野古新基地反対の阻止行動、抗議行動に参加しています。辺野古以外では、電気代1円一時不払いプロジェクトの世話人をしております。これは原発に反対する運動ですが、本来なら東電の電気の不買運動をしたいところですが、電力は、今はちょっと違いますが、地域独占ということで選択肢がないので、原発への抗議として一時、1円不払いをする、ということ呼びかけてます。この1円というのは、以前、国会議員の市川房枝さんが政治家への企業献金反対運動として、東電への1円不払い運動を展開し、企業献金を中止させました。市川さんの行動への敬意も表して1円不払いとしました。

【私と非暴力運動】

お二人の報告を聞いていて、自分も若いときにはそんなことも考えたなとか、考えなかったな、とか思いながら聞いておりました。私が非暴力に関心を持つようになったのは日本に非暴力トレーニングを紹介した阿木幸男さん、非暴力平和隊・日本の共同代表も一緒にしていますが、その阿木さんのトレーニングに参加したことがきっかけで、非暴力直接行動と言われるような行動、当時反原発運動が盛んでしたので、核燃料運送阻止の座込みとかの行動に取り組みました。

その後、1991年に湾岸戦争が起き、それに対して日本政府が90億ドル、1兆1700億円を出すということで、これは戦費にあたり、憲法9条に違反する、ということで、いろいろな反対行動に参加しましたが、そのうちの1つに戦費支出差止訴訟というのがあり、その原告になりました。原告は全国で2000人ほどになりました。それまで平和運動というと、ちょっと縁遠い感じがあったのですが、これが平和運動に参加するきっかけとなりました。先ほど報告された大澤さんが1995年生まれととのことですが、そういう人にとってはすでに歴史上の出来事になっているのだなあ、と改めて思いました。またその頃に、石谷行（すすむ）さんという、当時法政大学教授で、「良心的軍事費拒否・東京」という団体で運動をされている方と知り合いました。彼は絶対非戦を唱えるクエーカー教徒でもあり

ました。良心的軍事費拒否とは憲法で禁止された軍隊・自衛隊分まで税金を払う義務はない、という考えで、税金から防衛費分を引いた額の税金を払う、防衛費分の税金を不払いする、というものです。これを知って、それはいいことだ、理にかなっていると早速取り組みました。

その後、PKO法案が国会で審議されているときに、国会包囲行動というのがありましたが、そのときに不本意な逮捕者を出さないために、ピースキーパーと呼ばれる人員を配置しましたが、そのときに非暴力トレーニングを行ったりしました。非暴力トレーニングというのとちょっと堅苦しい感じがしますが、今流に言うところワークショップのようなもので、目指す社会が非暴力ならその手段も非暴力で、と皆で意見、アイデアを出し合ったり、具体的なシミュレーションを試みたり、また必要な法律の知識等も学びます。

さて、湾岸戦争の裁判に関わりながら、戦争はダメだ、ダメだというのはそのとおりだが、最大の暴力である戦争に対して非暴力は効果があるのか、対抗できるのかと考えていたら、米国の運動家からピース・ブリゲイド・インターナショナル(PBI)という運動体を紹介されました。日本語に直訳すると国際平和旅団となります。PBIはガンジーの非暴力主義を受け継ぐ人びとによって設立され、丸腰のボディガードとかも呼ばれたりしますが、紛争地で平和活動、人権活動をして

いるがゆえに、暗殺、誘拐などの脅威にさらされている人たちを守ることによって現地の人たちの手によって紛争解決がなされるよう支援する国際 NGO です。

よく Making Peace、直訳しますと、平和をつくるということが言われますが、PBI がするのは Making Space for Peace、平和のための空間、環境をつくるのが PBI の活動です。遠く離れた安全なところから非暴力を呼びかけるのではなく、あなたたちが非暴力でやるというなら、私たちも共にその危険を負担しましょう、というガンジー主義に基いた活動です。現在も世界各地で活動を展開しています。私は 1993~94 年にかけてスリランカに派遣されました。

同様の活動をする団は他に Christian Peacemaker Teams、Witness For Peace などありますが、これらをモデルに、より長期間、大規模に展開できる団体をつくらうということが、1999 年のハーグ平和会議で提起され、出来たのが Nonviolent Peaceforce、非暴力平和隊です。

あと非暴力というと、「9 条を抱きしめて」という DVD にもなっていますが、アレン・ネルソンさんのオーガナイズもしました。先ほど名前が出た石谷さんから、今度アレンさんという人が来るから成田空港で迎えてくれないか、と連絡あり、私はそのときは建設現場の仕事をし

ていたので、雨だったら仕事ないからいいですよ、と返事したらちょうど雨で、迎えることができました。

アレンさんは元米国海兵隊員のベトナム帰還兵で、ベトナムに派兵される前に沖縄のキャンプ・ハンセンで訓練を受けました。アレンさんは除隊後、いろいろな経緯を経て平和運動家、そしてクエーカー教徒になっていきます。1995 年の沖縄での米兵 3 人による少女暴行事件を受け、沖縄のクエーカー教徒が、米軍基地の中でどんな訓練がおこなわれているのか、戦争とはどんなものか話してほしい、とアレンさんに声を掛け、来日することになりました。成田でアレンさんを迎え話しをすると、私が PBI のトレーニングを受けるために滞在していたフィラデルフィアの近くにアレンさんも住んでいて、私も当時、クエーカーのボランティア団体 AFSC に出入りしていたので、共通の友人も多く、すぐ意気投合しました。

彼はなぜ軍隊に入ったのか、そして自らの軍隊体験、戦争体験を話すとともに、憲法 9 条がいかに素晴らしいものか、全国各地を講演して周りました。また彼も AVP という非暴力トレーニングのトレーナーでもあったので、一緒にワークショップ開催をしたりもしました。全国をまわるなかで、当時札幌で教えていた君島さんにもアレンさんの通訳をしてもらったりした関係で出会いました。

また私と沖縄の関係では、阿木さんに紹介されて一緒に、沖縄のガンジーと呼ばれた伊江島の阿波根昌鴻さんにお会いしに行ったのが、沖縄のことに関わるきっかけでした。1989年でしたが、それ以来、阿波根さんがつくられた「反戦平和資料館・ヌチドゥタカラの家」のお手伝いで毎年のように通っていましたが、2016年、1年ほどスタッフとして働き、その後、数カ月辺野古の運動にも参加してから帰ってこようと思っていたのですが、いまだに居る、ということです。

【沖縄での抵抗運動】

田村さん、大澤さんの話の中で抵抗の仕方、抵抗が見えなくなっているのではないか、というような指摘がありました。いま、私がいる沖縄でどのような抵抗運動が行われているのか、報告したいと思います。

ご存知の方も多いと思いますが、簡単におさらいしておきますと、那覇から北上していくと、普天間米軍基地、嘉手納基地、キャンプ・ハンセンとあり、名護市にはキャンプ・シュワブ、新基地をつくろうとしている辺野古、大浦湾があります。シュワブに隣接して辺野古弾薬庫もあります。

埋め立て用の土砂が本部（もとぶ）半島の鉱山から採掘され、目の前の塩川港、琉球セメント安和棧橋から海路、辺野古に運ばれてきます。当初数隻だった運搬

船も現在は20数隻使われています。

辺野古、大浦湾には臨時制限区域というのが設けられ、境界を示すフロートが設置されています。辺野古漁港の隣の松田ぬ浜というところからカヌーチームは漕ぎ出していきます。現在、辺野古側の護岸は完成し、その内側を埋め立てる作業が行われており、3.1メートルの高さまでの埋め立てが完了したと発表されています。最終的には8~10メートルの高さになる予定です。

【辺野古新基地の経緯】

1995年9月に米兵3人による少女暴行事件が起き、沖縄県民の怒りが沸き起こり、翌10月には8万5千人が集まる県民総決起集会が行われました。ちなみに沖縄では米軍、米軍族による刑事事件は復帰後だけでも約6千件起こされており、そのうち1割がいわゆる凶悪事件で、殺人、強姦、放火等の事件です。そしてまたもやこのような事件が起きたことに関して、決起集会に参加した当時の大田知事は、「行政の責任者として、少女の尊厳を守れなかったことを心の底からおわびしたい」と頭を下げました。この事件をきっかけとして、普天間飛行場の5~7年以内の返還が発表されましたが、移設の条件がついているために、25年たった今も返ってきてません。

その後、紆余曲折あり、最終的に辺野古沖を埋め立ててV字型の滑走路の新基

地をつくることになりました。2017年4月に海上での工事に着手、19年2月には辺野古埋め立ての賛否を問う県民投票が行われ、投票率52%、埋め立て反対が72%を占め、明確な民意が示されました。2013年年に仲井真知事が埋め立てを承認して以降、2期連続反対派の知事が当選、国政選挙でも当選したのはすべて反対を掲げる候補者でした。これを見れば沖縄県の民意は明らかです。

菅氏は選挙にはいろんな争点があると言いますが、2018年、政権が推す名護市長候補が当選すると「選挙は結果が全て。相手候補は必死に（辺野古沖の）埋め立て阻止を訴えた」と述べ、埋め立てが承認されたかのように発言します。また県民投票に関しても岩屋毅防衛相は「沖縄には沖縄の、国には国の民主主義がある」と投票結果を無視するような啞然とする発言をしています。一方、2015年佐賀県に普天間のオスプレイの訓練移転を打診したときには地元の反対を理由に取り下げています。なのになぜ沖縄は何度も反対の意思表示をしているのに続けられるのか、これは差別にほかならないと、当時の翁長知事でさえも言わざるを得ないひどい状況に沖縄が置かれています。

その建設強行にも軟弱地盤という難題が横たわっています。これは市民が情報公開請求で得た資料で明らかにしたものです。軟弱地盤に対応するために政府は県に対して設計変更申請を去年4月にし

ました。これには利害関係者、つまり市民も意見を出すことができ、1万7千を超える意見が寄せられ、すべてが埋め立てに否定的な意見でした。県が承認することはないと思いますが、判断は6月以降に出されるのではないかと、言われています。

【沖縄戦後の闘い】

戦後沖縄の闘い、米軍との闘い、復帰後はさらに日本政府との闘いと、連綿とした闘いの歴史があり、その線上に現在の辺野古の闘いもあります。

一つだけ紹介しますと、コザ暴動とかコザ騒動とか言ったりしますが、1970年の米軍統治下で起きました。当時、米兵が交通事故を起こしても無罪放免されるケースが相次いでおり、この事件も米兵の交通事故がきっかけで起き、米軍統治下で最大の「反乱」と言われています。

米兵車両70台以上が焼かれましたが、焼かれたのは白人兵の車だけで、黒人兵の車は焼かれませんでした。黒人は米国では自分たちと同じように抑圧された状況にある、ということを沖縄の人も知っていたからです。反対に事件のとき黒人兵からは、自分たちも米国で置かれている立場は沖縄の人たちと共通する点がある、沖縄の人たちの行為は正当な行為である、と賛同するビラが配られたりしました。

去年は事件から50周年ということで、

コザ、現在沖縄市と言いますが、そこで展示会が開かれたり、事件を再現して車をひっくり返すパフォーマンスなども行われたりしました。



【コザ騒動 事件当時】



【コザ騒動 事件当時を再現】

辺野古の問題に戻りまして最近の行動を紹介しますと、辺野古の埋め立てに県南部の土砂を使うことは認められない、とハンストが県庁前で行われました。現在は埋立に本部半島の土砂が使われていますが、埋立に必要な200万立米のうち7割は県外からの予定でした。しかし県の条例で埋立用土砂に外来生物が混入することを規制しており、これだけ大量の埋立用土砂に混入するのを防ぐのは困難と、県内南部から土砂を調達する方針を防衛局が出しました。

しかし、沖縄県南部は沖縄戦の激戦地の中でも激戦地で、遺骨収集もまだ終わっていません。沖縄戦の犠牲者の遺骨混じりの土砂を基地建設の埋立に使うのは犠牲者への冒瀆であると、遺骨収集ボランティアの具志堅隆松さんがハンストしました。



【ハンストする具志堅さん、前列】

多くの県民も共感し、県内各議会でも南部土砂を使わないよう求める意見書がいくつも採択されています。知事自身もハンストの現場に来て具志堅さんの話を聞きました。自然公園法に基づき、なんらかの措置を講ずる期限は4月16日までですので、県の判断が注目されます。これはハンストの場所に掲げられた写真ですが、過去もこれからも座り込んで沖縄県民は訴える、と書かれています。この写真自体は、1950年代の伊江島土地闘争のときの座込みの写真です。



【伊江島土地闘争での座込み】

残り時間が少ないので、現場での抗議行動を簡単に紹介します。

平和隊のニュースレターで毎号「沖縄報告」を載せておりますので、もう少し詳しく知りたい方は非暴力平和隊のウェブサイトにもアップされておりますのでご覧ください。

辺野古新基地反対の行動は辺野古はもちろん、その各資材搬出場所でも取り組まれ、その他にも要請・抗議などで、県庁、沖縄防衛局、北部土木事務所、国道事務所、逮捕者が出たときにはその警察署、海上保安部事務所などに出かけていきます。そして各選挙でも基地に反対する候補者を応援に行きます。現場での抗議行動をしながらなので、いくら人手があっても足りないし、足りてないのが現状です。抗議に参加してるのは60代はまだ若い方、70代、80代の人たちが頑張っています。若い世代は現場には少ないですが、情報発信やアピール行動など、それぞれ得意分野で頑張ってます。また米国の運動体とも連携し、米国でジュゴン裁判も起こしています。

さて現場での抗議行動ですが、埋立用土砂が積み込まれる安和棧橋。入口出口でノロノロ歩いて少しでも遅らせようと抗議行動が連日行われています。朝7時前から行動の準備をし、作業が終わる夜8時まで続きます。雨の日も風の日も作業がある限り行われます。



【安和棧橋入口で】

カヌーチームは棧橋や運搬船にまとわりついて出航を遅らせている行動。沖縄とはいえ、冬は寒いです。



【安和棧橋 カヌーチーム】

これは塩川港での行動。各現場には民間警備員がいますが、塩川港にはたぶん一番多い80人ほどがいます。辺野古関連

の警備費だけで一日 2600 万円かかっています。これもみんな私たちの税金です。これは塩川港から積み出される土砂です。本来なら岩ズリといわれる岩のクズなのですが、赤土です。これも違反です。



【塩川】

高江でのヘリパッド、オスプレイ着陸帯の建設反対の闘い、座込みです。このときは県外からも機動隊 500 人が動員され、総勢 1000 人の機動隊員によって座り込んでいる市民を排除し、工事を開始しました。



【高江】

辺野古のゲート前での座込みは 2014 年 7 月から始まりました。夏の日差しはまさに殺人光線のように、年配者が多いの

で、その炎天下で座り込むのはまさに命懸けです。



【辺野古ゲート】

大浦湾でのカヌーチームの抗議行動。先ほども言いましたように、かつては海保の対応は暴力的で、何人も負傷者が出ました。カヌーチームは比較的若い人も多いですが、最高齢は 76 歳です。しかも一番元気がいいです。

これは沖縄防衛局に申し入れに行ったときに会わない、というので会うまで待つ、ということで、防衛局入口での座込みです。その前日には県にも予約なしで行きましたが、会ったのになぜ防衛局は会わないのか、と座込みになりました。



【防衛局】

これは海兵隊が訓練のために本部港から大型ポートを出す予定でしたが、本部港は民間港であり、軍港ではない、と市民が本部港入口で阻止行動に取り組みました。離島の港が使われた例はいくつかありますが、沖縄本島でその例はなく、1つ許せば次々に本島の民間港も使われかねないと、朝5時からの行動でしたが、一日がかりで追い返すことができました。



【本部港 米軍ポートを追い返す】

このときは市民の他に全国港湾労働組合沖縄支部の組合員も独自に座込みをしました。普通の私たちの座込みは、やせ、ちび、年配者が多いのですが、彼ら港湾労働者の屈強な若者たちが、ドンッ、と5、60人座り込んでくれたので心強かったです。



【勝つまでは諦めない】

辺野古のテントにある看板ですが、勝つ方法はあきらめないこと。諦めなければいつかは勝てる、勝つまでは諦めない、を合言葉に闘いを続けています。

君島

大畑さんはNPJの共同代表で最初から一緒に活動をしてきた仲間です。大畑さんの非暴力抵抗運動の積み重ね（歴史）には感服します。

たとえば、アレン・ネルソンさんとの活動があります。アレン・ネルソンさんはベトナム帰還兵（海兵隊）で、ベトナム戦争の経験から過去を反省してクエーカー教徒になり、軍隊を否定して非暴力による平和活動に従事するようになりました。1990年代2000年代日本に來られて沖縄はじめ日本各地で講演やワークショップをやられて、大畑さんは通訳として同行されました。私も何度かアレンさんと会っていますが、NPJの立ち上げにも影響を与えた人です。

大畑さんは沖縄の伊江島の阿波根昌鴻さんとも関係があります。阿波根昌鴻さんは沖縄の非暴力抵抗の一つの方法を確立した伝説的な人ですが、この人の影響が今でも強くあります。沖縄の非暴力抵抗の運動として継承されてきています。

田村さんが運動の継承ということを話されましたが、非暴力抵抗という方法は沖縄でたしかに継承されていると思います。

まだ遺骨がまじっている沖縄の土地の土を辺野古の埋立に使うという仰天する

計画があります。沖縄の人から見ると冗談も休み休みに云えということでしょう。

結局、沖縄は戦後日本のマイナスをすべて背負ってきているところ、日本の安全保障の負の部分が全部沖縄に負わされている。東京の電力を福島原発に依存しているのと同じで東京の安全は沖縄によって維持されている。

抵抗ですべてが解決するわけではありませんが、しかしやむを得ない一つの方法として沖縄の人にとっての抵抗があると思います。

■ 報告 4

前田恵子

(NPJ 理事、元生協理事)

【抵抗の軌跡】

—上関原発に反対するひとびとによる多様な非暴力による抵抗のかたち—

【上関原発建設に関する反対運動について】

君島代表から辺野古新基地計画についての反対運動に比べて上関原発に関する報道は全国的には少ないので、経過や問題点を説明することと、反対運動について田村さんの著書のテーマとの関連ができればその視点での報告をとのお話がありましたので報告します。

報告の前に非暴力平和隊・日本とのかかりについて自己紹介をします。

地域生協の理事をしている時に平和活動の一環として大畑豊さんを講師に招き、

非暴力とは？というワークショップを開催したことが契機となり非暴力平和隊・日本と関わるようになりました。前年度はピースボートの「なんだろう地雷出前教室」というワークショップを夏休みに開催し、好評でした。生協の平和活動は被曝体験を語り継ぐといったものが多かったのですが、組合員の関心が薄れてきていたので体験型のワークショップという形に活路を見出したいという思いもありました。

【上関原発建設予定地の位置について】

上関原発建設計画ですが、まず位置を地図で確認してみましょう。



予定地は橋でつないだ島の先端部分になります。どうしてここが適地となるのか？考えられるのはここが本土側からは見えないということです。反対している祝島の島民の方たちからすると 3.5 km 先朝日の昇る方角に建設されるということになります。

【問題点】

問題点を 4 つの視点から整理してみま

した。

1 **安全性** 予定地は田ノ浦という海辺で埋立てをして原発を建設する計画になっています。出力 140 万 k w 原子炉 2 基のうち 1 基はその埋立地に掛かる形で設置されることになっており、調査で地盤も脆弱とわかっているにも関わらず、安全性を考慮した計画にはなっていません。

2 **防災対策**については原子力災害への対策はほぼ無視をされた状況です。震災による大事故進行中に建設を進めようというのにです。

山口県は埋立許可を出しただけでその上に建設される構造物のことはわからないといいますし、事業者である中国電力は避難計画などは自治体の仕事といって責任を押し付けあっているような状況です。住民の安全を確保しようという姿勢は両者共にありません。

3 **自然環境への影響**ですが、予定地の田ノ浦は瀬戸内海沿岸でも数少ない手つかずの自然が残っている場所です。海中は藻場で魚の生育に適していますし、ハヤブサやカンムリウミスズメといった貴重な生物の生息地でもあります。

4 **山口県民**にも建設に反対の意見が多い上に直接の被害を被る漁業者、漁協祝島支店が 10 億 8 千万円の補償金を受け取らず反対していることは重要です。海は売らないと補償金を拒否し続けていま

す（その中での工事は違法）

【経過】

建設計画が持ち上がってから 40 年の経過の年表です。

-
- 1982 年 計画が表面化
- 1985 年 上関町が誘致決議
- 1996 年 山口県知事が政府へ建設申し入れ
- 2001 年 電源開発基本計画に組み入れられる
- 2008 年 山口県が公有水面埋立許可を出す
- 2009 年 準備工事始まる
- 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の原子力過酷事故の影響で準備計画中断

.....

この中でもあまり知られていませんが 2005 年に電源開発基本計画の重要地点と指定された事が大きく、今も指定は外れていません。そのために住民の反対がであろうと 2011 年震災での過酷事故が起こり被害は続いたままでであろうと建設計画が撤回されることはないのです。

【多様な反対運動】

抵抗のために多様な反対運動を行ってきました。

選挙では建設に反対する議員や首長を増やそうと努力してきましたが、残念な結果になることも多かったです。反対している議員は問題を取り上げて議会で質

問をするので議会の傍聴を続けています。応援の意味もありますが、いかに関心を持っているかということのを他の議員や自治体職員にも知らしめるためです。

署名は数多く行いましたが、大きなものとしては100万人署名として経産省に提出したのがあります。

裁判も複数ありましたが、山口県に対して公有水面埋立許可取消を求める裁判について2021年1月21日に最高裁で原告適格がないとの判決で棄却されました。

ただ私たちはあきらめてはいません。知らせるために集会やイベントを行ってきました。大きなものとして数千人規模の「上関原発を建てさせない大集会」というものがありますが、コロナ禍の影響でここ2年は行っていません。イベントではお祭りのような参加しやすいものも心掛けています。

また3本の映画が作られ、各地で上映を重ねました。

・鎌仲ひとみ監督による島の暮らしとエネルギー転換を描いた核を描く3部作の3作目「ミツバチの羽音と地球の回転」、

・瀨瀬あや監督による原発反対運動と島の培ってきた暮らしを守ることは切り離せないということを描いた「祝の島」、

・現地で抗議行動も行ってた東条雅之監督による「祝福（いのり）の海」

3.11を体験して命という視点で福島と上関を描いたものなどです。

学習会も原発に関するものから自然

観察ツアーのように参加し易いもの等硬軟合わせて行ってきました。

【立ち上がるひとびと】

抵抗の形として祝島島民による毎週月曜日の島内デモがあります。反対の団結力を維持するためもありますが、近況を確認し合う意味もあるそうです。

この島民デモが山口県庁内で行われたことがありました。直接陳情に来た人々に会うことを拒否して知事が知事室に閉じこもり、職員にバリケードを張らせたため、陳情に来た人々が憤慨し、面会さえ拒絶する知事への抗議として県庁建物内でデモを行ったというものです。

建設予定地の現地では工事を進ませないために座り込みや海上での抗議行動が行われます。海上での抗議行動といっても主には漁船を出して漁業をする、工事は生活の糧となる漁業の邪魔になるのでやめてほしいというスタンスです。

そのサポートをするために有志で結成されたのが「虹のカヤック隊」です。非暴力で抵抗運動をするためにトレーニングを受けて現場に臨んでいます。

また山口県庁敷地内や経産省前でのハンガーストライキも有志によって行われました。

2011年1月末から2月にかけて10日ほど県庁敷地内で5名の若者が上関原発

建設反対を訴えてハンストを行っている間、既存の報道機関はまったく報道しませんでした。NHK 山口の当時の管理職に「なぜ報道をしないのか？」と尋ねましたら「ニュースはほのぼのとした話題を取り上げるようにしている。問題になっていることに対しては特集を組んで取り組んでいる」という回答でした。今起きている問題さえ報道しない、既存の報道機関に任せていてはだめだと感じました。

【「身体を張る」抵抗】

—デモと座り込み—

最も緊迫したのは2011年2月21日深夜から大規模な作業員600名を投入して工事を強行しようとした時でした。3.11の震災が起こる直前のことでした。駆け付けられる人はその場へ駆けつけ工事が強行されないように座り込みが行われました。

既成の報道機関はまたも報道しませんでした。現地からライブ中継とtweetによる拡散があったために現場へ行けなくても多くの人が見て関心を寄せてくれ、意見を発信したりや強引なやり方に抗議の電話をしてくれることにより、ひどい暴力への抑止となったことがあります。まさに非暴力隊の手法、情報発信の力を実感した体験でした。

「2011年2月21日 現地での抗議記録」その時の映像が残っているのですが、対話集会ではうまく再生できませんでした。

以下のサイトでぜひご覧ください。

.....

◆12月20日 中国電力による4800万円損害賠償の裁判 「虹のカヤック隊」

(ameblo.jp)

【スラップ訴訟は勝利】

裁判では残念な結果になることが多かったのですが、唯一実質勝訴というものがあります。

2009年12月に阻止行動を行っていた4名に対して中国電力が4800万円の損害請求をするというスラップ訴訟を起こしました。

嫌がらせと反対運動の萎縮を目論んだ訴訟でしたが、裁判が進む中で損害金額の根拠に答えられないことや、工事施工側の暴力行為が明るみに出ることにより、2016年8月に原告の中国電力が請求を全額放棄する和解が成立しました。しかし、この直前に山口県知事は埋立許可延長を発表したのです。

【～2021年 現在の状況】

残念ながら工事に必要な地上の道路整備は進んでいます。

中国電力は2020年10月より海上ボーリング調査を行おうとしましたが祝島島民を中心とした反対する人々が抗議をし、調査を行わせませんでした。

これも漁船を出し、生活の糧を得る行為を侵害しないでほしいと訴えるものでした。攻防は12月まで続きましたが、冬は海も荒れますので中国電力も調査の一時

中断を発表しました。

2021年3月現在までは動きは見えませんでした。4月からは再開するのではと見られています。(2021年5月にボーリング調査を再開するという発表がありました)

【学んだことと今後】

現地での阻止行動には路上での意思表示以上に覚悟がいります。

非暴力での抵抗を行うために手法の徹底と支える協力体制を整えることが重要です。誰もが最前線では闘えませんが、支える側になって可能なことをやっていくということもできるのではないかと考えます。

多様な意思表示のカタチを模索して表現すること、自らが発信していくことの大切さを感じます。

2014年から数千人規模の大集会を行ってきましたが2020年よりコロナウイルス禍での集会の在り方に変化を求められました。ネットパレードなど敷居が低く誰でも参加しやすいものも提案しています。

意志表明や行動することは香港やビルマの権力による迫害の事例を見ても自分の身を守ることにつながるということを忘れないでたいです。

田村さんの継承という視点でみるとこの10年の間に祝島には40名の移住者がありました。350名の島に40名の移住者というのは特異なことでしょう。原発建設に反対し、原発に依存しない自

立した生活を営むことへの共感が移住を増やした要因だと思います。

強引な工事に対して抗議活動をしている中で中国電力の職員に「漁業や農業だけでは暮らしていけないでしょう」と言われたことがあります。原発マネーを拒否して漁業や農業を中心に自立した生活を実践していることこそ、その言葉への反証となるものと考えます。

最前線で抗議活動に参加していた若者たちの中には祝島に移住した人もいますが、他の地方で生産の仕事に就きながら自分たちの納得する暮らしを始めた人もいます。地方ならではの抵抗の継承と言えると思います。

【参考資料】

参考にしたサイトや書籍に以下のものがあります。

特に上関原発問題を追及し続けているジャーナリスト秋山真さんの「原発をつくらせないひとびと」は参考にさせてもらうことが多かったです。

■ストップ！上関原発！（stop-kaminoseki.net）

■上関原発問題（iwaishima.jp）

■上関原発を建てさせない山口大集会2020（wixsite.com）

■ブログ 虹のカヤック隊（ameblo.jp）

■国策の行方 上関原発計画の20年/朝日新聞山口支局（著者）

■原発をつくらせない人びと/山秋真著
以上で報告を終わります。

君島

前田さんには単に効果をあげているだけではなく、あらゆる形、多彩な形の抵抗運動を駆使されている運動の歴史を話していただき、ありがとうございました。

これからしばらく討論を始めたい。少なくとも4人の間でやり取りができるといいと思います。或いは会場から、Zoom参加の方からでも発言してください。

■ 会場からの質問

植松青児

田村さんのご著書で発言が採録されている一人、植松青児と申します。2年前から週刊「金曜日」編集部で仕事しておりますが、ここでは自分もこの10年の市民運動に参加してきた一人として発言します。

田村さんの仰った「光」と「熱」という概念はとても重要だと思います。ただ、ふりかえると、「熱」は全然足りていなかったと思います。自分自身も、社会運動全体も。そのように総括することが、今後の希望をたぐり寄せるには必要だと感じています。

田村さんのご著書の248頁に、田村さんとの対話の中で自分がようやく気がついたことが載っています。社会運動は街頭で、駅前「光」=正義・justiceを語りだす前に、目の前の市民に「あなたは

素晴らしい、こんな酷い世の中でも懸命に生きているあなたは素晴らしい」とまず語りかけるべきではなかったかということです。

労働組合など「中間集団」が一定機能している他国・地域と異なり、中間集団が弱体化している日本では、孤立した市民に対して、街頭にダイレクトに社会運動が語りかける構図になっています。その中で、「反原発」などの正義を語る前に「私たち、こんなに政治や社会が酷いの、頑張って生きているよね、我慢して生きているよね」と自分たちを褒める、賞賛するような語りかけが、社会運動には求められているのではないか。

実は、これは決して新しい問題ではなく、自分が今の大澤さんと同じ年齢だった頃（1980年代）に、イタリアでアントニオ・ネグリらが関わった「アウトノミア」運動の人たちが語っていたことです。「私たちは、私たちが今置かれている現状より、ずっと素晴らしい存在なのだ」と。そして、近年ではジェイミー・コービンら英国の左派が、演説の冒頭に必ずそのようなことを語りかけている。

これこそが「熱」なのだろうと思うのです。あなたの「熱」を感じています、受け取っていますと、熱のある言葉で語る。自分はこの10年、このような熱のある言葉をきちんと語ってきたとは言えません。

しかし今、そしてこれから、このような語りかけは緊要になっています。コロナ禍の中で仕事も住む場所も失った人が急増しているからです。

そのような困窮者を緊急支援する、瀬戸大作さんたち「コロナ危機緊急アクション」のアクティビストは、電話やメールでSOSを受け取って、困窮者のところに駆けつけたら最初に「SOSを送ってきてくれてありがとう、よく我慢したね」と声をかけるそうです。そして緊急支援費として当面の食費、携帯電話代、光熱費を手渡しし、さらに翌日以降、生活保護などの申請に別のアクティビストが同行して、公的支援を受けられるようにバックアップしています。

そのような活動に関わる人たちの「熱」や言葉を、街頭の市民運動の人たちも学び取ること、そして自分たちも「熱」を出し惜しみしないことが、今、私自身を含めて必要とされていると思います。

田村

そうなんですよね。3・11から10年たった今の状況をみると、ひどい。反原発運動が盛り上がり、社会が変わると思っていたのに変わらなかった、という絶望はある。もちろん変わった人もたくさんいると断ったうえで、でも今の日本社会をみていると絶望の方が大きいです。それはやはり熱が足りなかったと思う。熱というのは平たく言えば愛です。(植松

さんがおっしゃる)「あなたは頑張って生きてきたね」というのは愛です。愛が大事とは、くさい言葉なのでなかなか言いませんし、私は熱と言い換えています、やはりそれが重要と言いたい。

飯高京子 (会員)

日本友和会会員で、本会の会員でもあります。田村さんが「熱」とは愛だと言われました。それが非暴力抵抗の一番の基本になるのではないかと。

毎年少しですが、辺野古とかの座込みに参加させていただいてますが、雇われている警備員は表情一つ変えないんですね。沖縄県民である若い警察官たちは私たちを見て動揺するんです。小声で、気をつけなさい、とか。ちょっと小声の会話なんかもできたりして、たいへんな思いしてお仕事大変ですねとか聞くと、朝早く出てここに来ているけど、自分たちの役目はみなさんを守ることです、と沖縄の警察の人は言います。しかしお金で雇われている(本土からきた)警備の人たちは顔色一つ変えない。また一方、(参加者の方で)残念だと思うのは人によっては、警備している人、工事している人のことをののしるんですね。

そういう中で、非暴力で抵抗する、相手のために祈る、という精神を持つのは、機動隊にゴボウ抜きとかされて乱暴に扱われると、相手を憎まないで相手のために祈るということは難しいな、としみじ

み思います。

テレビでも大臣らが嘘八百並べているとそれこそ怒り心頭に達します。怒鳴ることを我慢する、彼らのために祈るなんて私には到底できないと思いつつ、けどそのような気持ちでないと非暴力の抵抗はできない、相手を殺したくなるじゃないかな、と思います。ちょっと言われましたが、愛というか思いやりというか、互いに憎しみ合うのではなくて、互いにこれを乗り越えようという気持ちをお互いに伝え合うのは本当に難しいし、訓練が必要なんだな、と思いました。

大畑

闘いの現場にいるといろいろあります。非暴力とはなんだろうか、などと考えることは多々あります。

ある牧師さんが、ゲート前で言うておられたのですが、自分はこのゲート前に来るたびに自分の人格が壊れる気がする、と。つまりそれだけひどいことを機動隊とかにされていて、あるいは目の当たりにしていて、その人たちのために祈りなさい、というのは確かに難しいのでは、と思います。

私自身この人たちは、ただ単に仕事で自分たちを排除しているのではなくて、私たちに恨みを持ってやっているとしたか思えないことがあります。排除するとき腕をひねる、つねるとか、見えないと

ころで膝蹴りしていくとか。そうした状況で祈るとするのは、目の前にいる人は「敵」ではない、と思っても、難しいと思います。

抗議船の船長もしていますが、海上行動で何かがあったときには海保（海上保安庁）と対応する立場にあります。以前海上行動が始まったころには海保は乱暴で、抗議船を転覆する、なんてこともしましたし、海に放り出されて浮かんできたカヌーメンバーの頭を押し付けて沈めさせる、というひどいこともしています。最近は穏やかになってきてますが、それでもカヌーを転覆させて拘束する、ということが先日ありました。これは命に関わる危険な行為です。私は思わず「こら、海保、何危険な行為をしてるんだ。安全に抗議活動をしているのに、危険な拘束をするな！」と大声で怒鳴りました。そのときたまたま牧師さんが同じ船に乗っていて「大畑さんて非暴力って聞いてましたけど、非暴力って、なんかすごいんですね」と驚いていて、もう少し穏やかな言い方の方が良かったかな、と反省しましたが。

非暴力とか、愛とか、相手のために祈るとか、頭の中ではわかっているけど、ああいう現場にいて、痛い目にあったり、目の当たりにするとそういう言動になってしまったりすることはあります。反省すべきことは反省すべきですが、その瞬間の言動だけみて、いい悪い、言うのは

どうかと思います。

怒りの感情を持つだけでも暴力、とも言いますが、怒りの感情自体は人間の自然な感情の一つで、悪いとは思いません。その怒りの感情に支配されてしまうのは良くないと思いますが、その怒りのエネルギーをプラスの行動力に変えていくよう努力することが大切だと思います。

田村

運動の中で闘う人がいる、けれども闘えない人もたくさんいる。地方には闘わざるを得ない人たちがいる。沖縄にしろう上関にしろ福島にしろ、戦後日本社会のツケを押し付けられてきた人たちが地方で声を上げている、けど一方で都会のマジョリティの人たちはそのニュースを見て、自分も立ち上がらなきゃと思うけど、彼らは時が来れば諦めることができる。彼らはシステムを変えるより、このシステムの中で勝ち残ることを考えた方が楽だと思ってしまう。ではそういう人たちが勝者かといえば、実際にはひとにぎりの人しか勝者になれず、結局苦しい思いをする。だから、本当はこの人たちと、地方の虐げられた人たちが連帯しないとイケない。けれどもできない現実がある。

諦めようのないところで闘っているお二人とどうつながるのかと考えたときに、闘いの現場では怒りが大切だと思います。でも私はそうじゃない人たち、マジョリティの価値観に順応を強いられつ

つ必死に頑張っている人たちに届く言葉を考えたい。それは、私がそっち側で生きてきたからです。

そう考えたときに抵抗の言葉として、これまでの硬い「闘うための言葉」プラス、これまで耐えてきた人たちに「良くやってきたね」と言えるような言葉も考えたい。なぜならその人たちは敵でなくて一緒に闘いに加わるべき人たちだから。彼らに闘いの場に出ていく力を与えるものはやはり熱であり、そういうものがこれからの運動に必要だと思います。

君島

前田さん、田村さん発言に対するコメントをお願いします。

前田

住んでいる地域の問題なので関わっていますが、出身は首都圏なのでそのまま住んでいたら情報もなく、関心も寄せず、関わらなかったかもしれません。

学生の頃は田村さんや大澤さんのように考え、行動に移すということはありませんでした。お2人に敬意を表したいです。私は一介の労働者で家庭の事情もあり、最前線での反対運動に集中することはできずにいます。なので本当にできる範囲でしかやってきていません。多くの人をオーガナイズすることはあまり考えていませんが、生きている地での問題なので自分自身が後で後悔しないように行動したいと考えています。本当は現場

の抵抗だけでは阻止は難しいと考えています。

私自身は政治の決断が必要だと考えています。ただ、政治が動くことは長い間でできてしまった利権構造もあり、なかなか進みません。動かないからと言ってあきらめてしまわずに多様な方法でできることを個人個人がやっていくしかないという思いはあります。特に選挙権を行使するというのを放棄しないでほしいと思います。

研究者である田村さんが人を動かすのは情動と言われたのははっとする思いでした。その言葉に私は勇気をもらえたような気がします。

川口和正

非暴力平和隊の会合に初めて参加しましたが、抵抗するときには怒鳴ったりするのも慎まなくてはいけない、祈るべきという発言がありました。非暴力の使われている意味として、言葉で怒鳴るとか、叱責するとか、相手に怒りの表現をするということも含めて非暴力と言っているのか。

大畑

非暴力トレーニングでは、これが非暴力です、というやり方はせず、何が非暴力だと思いますか、何が暴力だと思いますか、と聞きます。今言われたように、叫ぶことが暴力だと思う人もいますし、そうじゃないという人もいます。自分が

なぜそう思うのか、そう感じるのか、お互いにコミュニケーションをとりながら相互理解をしていく、この人はこういう理由で暴力とを感じるのか、とお互いに理解していくことをしていきます。

あと現場でいうと、もちろん相手を侮辱するような言葉はよくないですが、つい出てしまう、痛いだろうこの野郎、お年寄りに何するんだ、という言葉は、いけないという人もいますが、私としては、そういう言葉はいわば魂の叫びであり、それを問題にされたら言いにくいことになると思います。ただそのような言葉はいけない、という意見が出たらその場で対応していく必要はあると思います。機動隊とか作業員に対して侮辱するような発言もあつたりしますが、そのようなときには、同じ人間同士、たまたま雇われてやっているにすぎない、労働者という立場を理解しながら謹んでください、と言うことはあります。その場の状況で、これを言ったらすぐ暴力、ということは、物理的な暴力はもちろんだめですが、言葉に関してはそれぞれ価値観もありますので、その場その場で考えていくことが大事だと思います。

君島

暴力と非暴力の考え方は色々ありますが、非暴力平和隊は武器を使わないというのが基本です。軍事的な選択肢を極力避けていって平和を創ろう、軍事的選択肢を排除していこうというのが大きな

方向転換です。

君島

徳留さん一言話してください。

徳留

(元 NP フィリピン、スリランカ・

フィールド・メンバー)

久しぶりに皆さんにお会いでき、そして若い方達の力を感じて、NPJ に若いパワーが入ったと感じました。個人的な理由で様々な活動や、NPJ の活動にも参加できずにいて、心苦しいですが、やはり非暴力の運動を継承していくのは、このように関心のある方達の間で話をすることで共有できます。

しかし外にどのように伝えていくのか？非暴力の活動をしていても、周りには暴力的に映ってしまうのが、とても一番悲しい結果だと思います。やはり私も折に触れて、どうしても政治的な言葉に、関心がない人には聞こえてしまう分野とか、なってしまうと思います。

しかし今日は皆さんの話を聞いて、「熱」を頂いて、自分の中での活動に対する情熱も生まれてきます。しかし、いかに皆さんに自然に感じてもらえるように。「宗教とか信じないとダメだよ」とか、そういう感じではなくて、いかに自分の正義感からであり、正しい事であっても、伝え方によってすごく間違っただけ方向へ飛躍してしまうというのが、自分も活動をしていて、どんなにいい事であっても伝え方ひとつで、すごく悪い方向へ進んでしまうということがあると思いま

す。

だから逆に今までの中で活動が、報道のせいもあると思いますが、SEALDs の活動が若者のパワーで良かったのが、どこか暴力的に報道されてしまうと、また違う団体に映ってしまいました。

行動の伝え方。SNS とかの媒体もありますが、いかにそこを工夫して伝えていたら良いのかと、皆さんの発表を聞きながら感じました。

前田さんも大畑さんも、常に最前線ですと活動を継続されていて、私は穴があったら入りたいぐらいの幽霊会員で申し訳ございません。

自分も話を聞いて、「伝えたい」と思って、SNS とかに載せますが、それに対しての反応というのが、いまいち伝わるのがすごく難しいなと思います。

また、今日は皆さんから頂いた情報等も地道に周りに、敷居は高いものではなく低いものであり、「実生活の中にも関わってくるものなんだよ」と、鹿児島も原発もありますし、沖縄も近いですので、また伝えていけたらと思います。

君島

ありがとうございます。会場の時間がオーバーしてしまいましたので、ここで今日の集会は終了とさせていただきます。ご参加のみなさま、ありがとうございます。